「それゆえに」

エペソ人への手紙４：１－３

July.9.2023

エペソ人への手紙４：１－３（パワポ）

Preface

皆さんに一つ質問させてください。

福音とは、何でしょうか？　聖書の語る福音とは何でしょうか？

人は生まれながらにして罪人であり、神の御怒りを受けるべき子らであったけれども、主イエス・キリストを我が罪の救い主として受け入れる者には、永遠のいのちが与えられ、死んだら、地獄ではなく天の御国に行き、主なる神様とともに永遠に住まうこと。

これが福音でしょうか？

もちろん、福音です。

でも、正確に言うならば、これでは、片手落ちの福音になってしまいます。

なぜならば、この地で生きることの大切さが、ごっそり抜けているからです。

永遠のいのちが与えられ、神の御住まいにて神とともに永遠に生きるという特権が与えられた者として、この地を、この世界をどう生きるのかが、ごっそり抜け落ちているので、片手落ちの福音となってしまいます。

正直私たち、人間として、「この世界をどう生きて行くのか」ということについて、誰もが悩んでいます。

そして聖書は、聖書の語る福音は、この世界でどう生きればいいのかということとはかけ離れた、現実離れした話ではなく、むしろ、聖書の内容のその多くは、人として、どうこの世界を生きるのかということについて語っています。

Part One

今日から、エペソ書４章に入りますが、エペソ書は、大きく分けて１～３章までの前半部分と、４～６章までの後半部分に分けることが出来ます。

１～３章はキリスト教信仰における核心的教理について書かれており、４～６章はその教理の実践、教理をどう生きるのかについて語ります。

教理が教理としての価値を発揮するために必要不可欠なのは、実践です。

実践の無い教理は、何の役にも立たないどころか、むしろ毒になる可能性もあります。

キリスト教の長い歴史の中で、実践の伴わない教理の論争に没頭するあまり、多くの時間を浪費してしまうようなこともありました。

先天的に神様から優秀な知的思考能力を与えられた人たちが、キリスト教教理の研究に熱中するあまり、一生涯、重箱の隅をつつくように自らの知的欲求を

満たすことだけに留まってしまい、教理をどう実存的に適用させ生きるのか、どうその教理によって自らが変わるのかということには関心を向けないことが、繰り返されてきました。
　または、特定の聖書箇所や特定の教えばかりに執着しこだわったせいで、少なくない数の異端や分派が起こってきました。

　では、「教理は必要ないのか」というと、そんなことはありません。
　もし教理が無いならば、それは、実体の無いものになります。
　教理の無い実践は、空を打つようなもので、そこに答えはありません。
　ただあるのは、何だか良く分からないけれども、とりあえずやったということによる自己満足と、自己満足の後に襲ってくる空しさ儚さだけです。
　私たちが生きるこの世界は、まことの神の教理が無いために、空を打つような空しさと儚さに付き纏われていると、言えるかもしれません。

　またクリスチャンにあって、聖書の語る教理、エペソ書１～３章まで語ってきたキリスト教教理の真髄のような内容ではなく、自分の好きな聖書箇所、ひどい時には一つ、または数箇所をかき集めたり、家の壁に掛けられている聖書の言葉だけに愛着を持って、自分がそれまで養ってきた人生経験や常識や善悪の基準や趣向と混ぜ合わせて、自分の考えるキリスト教像、自分の考える聖書観、自分の考える神観、自分の考える人生観、自分の考える生き方や倫理道徳観などに立って、人を裁き、世を裁き、意識してか無意識の内か、聖書の御言葉さえも私の持つ価値観で裁き、それなりの信仰者としてやれていると錯覚じみた自覚に陥っていることがあります。
　もちろん、私たち未だに罪を内包している罪人ですので、誰もが完璧に正しくあれるということはありませんが、神の言葉の真っ当な実践ということにおいて、いつも細心の注意を払わなければならないでしょう。

　聖書は、ある一部分だけを取って考えるのではなく、創世記からヨハネの黙示録に至るまで余すところなく読み、その全体から語られる教えに従い、導きを受けて、この世で実践して行かなければならないですね。
　使徒パウロ先生は、長い長い創世記から黙示録に至るまでの聖書の教えのその目的、原理、約束、希望などの教理の核心的内容について、聖霊の導きに従って、エペソ書１～３章に明確に記して下さいました。
　何のために？
　４章以降の実践のためにです。

　使徒パウロがエペソ書を書いた目的は、ある意味、４章以降の実践を促すためです。
　そして、その実践に必要な基、動機、理由を、１～３章に記したわけです。
　じゃあ、その１～３章に書かれたキリスト教教理の真髄を、どう実践していくのか？

その教理をどう実践していくのか？
４章２節、３節にある通りですね。

エペソ人への手紙４：２－３（パワポ）

これ以上の、「教理の実践とは何ぞや」という質問に対しての答えは無いでしょう。
ここにある内容が、御言葉の、キリスト教教理の実践のすべてです。
「エペソ１~３章に書かれている人知をはるかに超える内容を生きることが出来ているのか出来ていないのかに、細心の注意を図る」とは、この２節、３節の言葉が、私の生き方に反映され、目標となり、指針となっているだろうかということを真正直に考え、見つめ、祈り、検討することです。

もうしそうするならば、必ずや私たちは、私たちの首を垂れることになるでしょう。
跪いて、主の赦しと慈しみと哀れみを乞わずにはいられなくなるでしょうし、この御言葉通りに接することが出来なかった対象が、人の顔が脳裏に思い浮かぶことでしょうし、謝りたい、赦してもらいたい、申し訳なかったという思いが、心の深い所から湧き上がってくることでしょう。

先週の聖餐礼拝で、「聖餐を毎日生きましょう」ということを分かち合いましたが、以前、とあるアメリにある教会の聖餐式の時、その教会の主任牧師が、第一コリント１１：２７からの御言葉を読んだ後、「もし今、この御言葉を読んで心刺される人がいらっしゃるならば、まずその心刺される内容を解決してから聖餐のパンとぶどう酒をお受け下さい」と勧めたそうです。

コリント人への手紙第一１１：２７－２９（パワポ）

すると、その牧師のメッセージを聞いていた人たちの少なくない数の人々が立ち上がり、ある人は、他の場所に座っていた人に近寄って行き話しかけ、またある人たちは、礼拝堂を出て行き、当時は携帯電話がありませんでしたので、礼拝堂の外にある公衆電話に列をなして、心に思い浮かんだ人に謝りたい、赦して欲しい、申し訳なかったと電話をかけ始めたそうです。

凄いなあと思いますね。
こう語り掛けた牧師も凄いですし、その語り掛けられた言葉に即座に反応する人々も凄いですし、聖霊が、教理の実践へと導いて行かれたことも凄いなあと思います。
正に、「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」という御言葉の実践、教理の実践の恵みに与ったわけです。

Part Two

使徒パウロは、エペソ書１章と３章でこのように祈りました。

エペソ人への手紙１：１７－１９（パワポ）
エペソ人への手紙３：１７－１９（パワポ）

「知ることが出来ますように、キリストを住まわせて下さいますように、満たされますように」とパウロが祈ったのは、私たちの自己満足のためではありませんでした。

「私は神に愛されているクリスチャン！　私は愛され、神に肯定されている存在なの！」と、伝家の宝刀を振りかざすかのように、または、水戸黄門の印籠のように、「この紋所が目に入らぬか！　こちらにおわす御方をどなたと心得る！恐れ多くも先の副将軍、水戸光圀公にあらせられるぞ！　一同！ご老公の御前である！　頭が高い！　ひかえろう！」と言うように、自らの凄さを、自らが愛されている存在なんだということを主張出来るように祈ったのでもありません。

私たちの知的欲求や物質的欲求や身体的・精神的欲求を満足させるためではなく、実践のためです。
御言葉の実践のために祈りました。
つまり、生きるためです。
人が、人として、人らしく生きるためにです。
神の言葉に生き、神の言葉を実践し、神の愛が表れ、神の言葉は生きて働くということを目の当たりにするために、「知ることが出来ますように、キリストを住まわせて下さいますように、満たされますように」と祈ったわけです。
知ることや満たされることに留まることが、信仰の目的ではありません。

イエス様というお方もそうでありました。
イエス様がまだ１２歳という少年の時、神の宮で、律法学者たちと聖書について語りあったところ、ロゴス、御言葉なるお方ですから、当然ながら、そこにいたどの優秀な聖書学者たちよりも遥かに優れており、すべてを凌駕していました。
つまり、知ることにおいて、神の言葉を知ることにおいてイエス様の右に出る者は誰一人としていなかったのです。

なので直ぐにでも、メシア、キリストとしてのお働きを、神童と言われながら始めなさっても良かったようにも思ってしまうのですが、イエス様はそうはされませんでした。
ルカの福音書３：２３を見ますと、「イエスは、働きを始められたとき、およそ三十歳で」と書いてありますが、約１８年間もの間、神の言葉そのものであられるお方が、誰よりもすべてにおいて知っておられるお方が、市井の人として、

一庶民として人間社会を生き、人を知り、人の営みの中で御言葉を生きることを実践されました。
　そうして、人の痛みを知り、不条理を知り、弱さを知り、貧しさを知り、同情し、罪を知らないお方であるにもかかわらず、罪ある者たちの中で、罪ある世界の中で生きられました。

　そして遂に、罪人たちを癒やし、慰め、新しく生まれさせるために、公生涯を始めなさり、初めて人々に向かってお語りになった言葉がマタイ５章からの山上の垂訓です。
　その第一声が、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」でした。
　旧約聖書の神の言葉そのものであられるお方が、人々の中で生き、実践し、紡ぎ出した、新約聖書最初の説教の始まりの言葉が、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」でした。
　貧しいことが痛みであり、貧しいことが傷であり、貧しいことが苦しみであり、貧しいことが不条理であり、貧しいことが運命のように感じていた多くの人々にとって、初めて、「貧しい」という言葉が希望に聞こえる瞬間でした。

　物質的な富や物質的な貧しさが人の幸いを左右するのではなく、神の前にある心の在り様が、人の真の貧しさを決め、人の真の富を決めるということを人々に、実感の籠った言葉をもって語られました。
　そして、その語った言葉が事実であることを示すために、神の言葉の実践の極致である十字架に架かられ、人々に救いを示してくださいました。

　「そんなイエス様に倣うように」と、「イエス様が下さったものを思い出し、イエス様がなさったことの広さ、長さ、高さ、深さの止めどもなさを知り、イエス様が人々に施し接したように、謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」と、片手落ちの福音ではなく、福音の全体を、福音の真髄の実践を、パウロ先生は語り、促しておられます。

Part Three

　英語のアルファベットは２６文字ですが、イエス・キリストを表すアルファベットの文字が何かご存知でしょうか？
　Ｘです。

　ギリシャ語でキリストのことを「クリストス Χριστος」と言いますが、その頭文字がＸ、ギリシャ語ではキーと読みますが、そのキー、Ｘという文字がクリストス Χριστος の頭文字になります。
　なので、クリスマスを「Ｘｍａｓ」と書くことがありますが、このＸは、本来英語のＸではなく、ギリシャ語の「キー」から来ている表現なんです。

で、そのＸ（エックス）、キーという文字の形、その文字の特徴は、面白いことにイエス様の生き様やクリスチャンの生き様を表す象形文字のようでもあるんです。
Ｘという文字は、二つの同じ長さのバーがちょうど真ん中で、同じように交差して出来ています。
Ｘの上の部分と、Ｘの下の部分は、長さも分量も全く同じです。

ある時、律法学者と言われる聖書の専門家が、イエス様のところに来て、イエス様を試そうと、イエス様を試して、「人々の前で赤っ恥をかかせてやろう」と、小憎たらしい魂胆を持ってイエス様に質問をしました。
「先生、あなたは人々を熱狂させるほどの聖書の知識をお持ちですが、そんなあなたにひとつ質問させてください。
聖書の中で、最も大事な教え、最も大事な戒めは何でしょうか？」

何でこんな質問をしたかと言いますと、当時、律法学者たちは、旧約聖書３９巻の御言葉を６１３の戒めに分類して、その６１３の戒めの中で、どの戒めが一番大事なのかということを毎日のように論争していました。
その様子は、あたかも重箱の隅をつつくような無毛な争いであり、ただただ自らの知識や研究熱心さを自慢するだけであって、その神の言葉をどれ程に実践し、生きているのか、その神の言葉の前に自らをどれだけ降伏させ、変わろうとしているのかには、ほとんど関心がありませんでした。
そんな彼らのプライドに触れたのか、もしイエス様が、「この聖書の教えが一番大事だ」と仰ったならば、「いやいや、先生、それは一番ではないですよ。こちらの教えの方が優れていますし、今の時代、あなたが一番大事だというその戒めは時代遅れですし、今、人々に受け入れられ、時代の流れに乗っているのは、こちらの戒めです。　神の子だというお方が、そんなことも分からないんですか？」なんていう風に、いちゃもんを付けようと思っていたわけです。

ところが、イエス様は、そんな律法学者の魂胆を当然のように見抜き、しかも、神の言葉である聖書を知っておられる程度ではなく、その言葉そのものであられるお方ですから、律法学者たちがうんともすんとも言えないぐらいに、完璧に応答をされました。

マタイの福音書２２：３５－４０（パワポ）

イエス様は、申命記６：５の御言葉とレビ記１９：１８の御言葉を取り上げて、申命記６：５が一番重要だとか、レビ記１９：１８の方が一番重要だとは仰らずに、「二つの戒め、御言葉ともに重要だ」と仰いました。
しかも、「この二つの戒め御言葉に、聖書のすべてが掛かっている」と聖書の御言葉を一つにまとめ上げなさり、聖書の言葉に優劣を付けるという、神の言葉を利用した彼らの自己満足的知的探求を一刀両断されました。

律法学者たちの魂胆を当然ながら見抜いておられたイエス様は、どんな突っ込みどころもない程に、完璧にお答えになりました。

そしてその、「あなたが心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という言葉と、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という言葉は、両方ともに、実践の言葉です。
受けたことで満足に至るのではなく、実践をもって満足に至らしめる御言葉です。

さらに、「この二つの戒めに、聖書全体がかかっている」と仰いますが、聖書全体、この当時２０００年前の時代は、まだ新約聖書が無く、旧約聖書しかありませんでしたので、旧約聖書３９巻全体をギュッと一つにまとめた戒め、神の言葉が何なのかと言いますと、出エジプト記２０章に記されているモーセの十戒です。
新旧約聖書６６巻は、約１５００年という月日をかけて、約３０名という人々の手を神さまが用いなさって記録されたものですが、その聖書の言葉のうち唯一、神が直接ご自身の指をもって書き記しれたのが、十戒でした。

そして、その十戒は、大きく分けて二つの内容に分けることが出来ます。
第一戒から第四戒、第五戒から第十戒に分けることが出来ます。
第一戒から第四戒までの内容は、「わたし以外に、ほかの神があってはならない。偶像を造ってはならない。安息日を守りなさい」等の、神に対する私たちの姿勢、つまり、イエス様が仰った「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という内容であり、
第五戒から第十戒までの内容は、「父母を敬え。殺してはならない。盗んではならない。姦淫してはならない」等の、人々に対する私たちの姿勢、つまり、イエス様が仰った「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という内容です。

「あーでもない、こーでもない」と、神の言葉をこねくり回していたどの律法学者たちも気付き得なかった、見逃していた福音の真髄を、唯一、神が直接その指をもって刻まれた御言葉に、モーセの十戒に見出し、それを短く簡潔に一言で、宣言されました。
真理は、いつも明快であり、明瞭であり、簡潔ですね。
分かる人にしか分からないような専門的な御託が並べられているのは、真理ではないでしょう。

Part Four

ここで、先程のＸという文字に返ってみましょう。
Ｘの二つのバーが交わる点を、私たちという存在に例えることが出来ます。
その交わる点から上に向かって伸びている二つのバーは、天に向かって伸びています。

そして、その交わる点から下に向かっている二つのバーは、地に向かって広がるように伸びています。
つまり、上には神を愛し、下には人を愛すということが、その一文字に表されているんです。

もっと言うならば、上の方から交わる点に向かって神の愛が集中的に注がれ、その注がれた愛が交わる点を通して、即ち、私たちという存在を通して、人々へと実践されていくのです。
そして何よりも、イエス様ご自身が、このＸという文字に表される生き様をこの地上で生きられました。

父なる神の愛をその身に受けるばかりか、父なる神を愛し、受けたその愛を人々に向かってお示しになられました。
そして、その愛をお示しになった方法が、十字架です。
十字架もクロス、Ｘですね。
クリストス Χριστος の頭文字もＸ、「キリスト者」のギリシャ語クリスティアノス Χριστιανός の頭文字もＸです。
（クリスティアノス Χριστιανός＝「小さなキリスト」「キリストに似た者」「キリストに属する者」）

使徒パウロは、このＸを、６章からなるエペソ人への手紙に書き表したわけです。

Conclusion

今私たちは、Ｘの上の部分、心を尽くし、思いを尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして神を愛すことと、心を尽くし、思いを尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして神が私たちを愛しておられることを、エペソ書１～３章において学んできました。
学んだだけでなく、さらに知り、さらに満たされるようにと祈って参りました。

そして今日から、Ｘの下の部分、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」ということを学んで行きます。
いや、学ぶだけでなく実践していくことを、父なる神、御子なるイエス、御霊なる神の三位一体の神さまより期待され、チャレンジを受け、実際に実践できるよう努め、努めるためにさらに知り、満たされ、「キリストを私の心のうちに住まわせてください」と祈っていくのです。

ワクワクします。
私たちの人生には、もう既にＸがあります。
ならば、そのＸをどう生きるのか、どう表すのか、どう体現するのかが残って

いるのみです。
　Ｘを生きましょう。
　Ｘを知りましょう。

　お祈りいたします。
　祝祷：エペソ４：１ｂ－３